



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2721 号 2015.11.16 発行

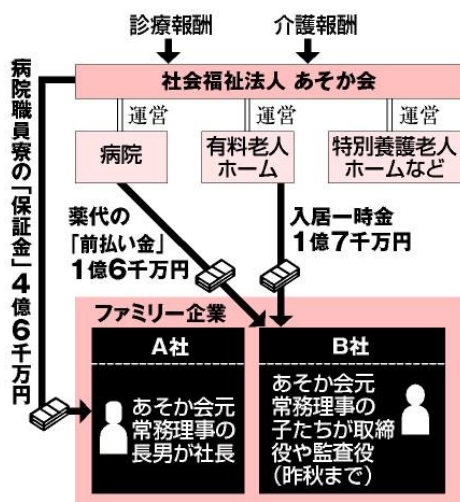
社会保障費予算、1700億円「抑制を」 財政審提言案 朝日新聞 2015年11月16日
 財務相の諮問機関である財政制度等審議会は、来年度の予算編成で、高齢化で膨らむ社会保障費を、厚生労働省の概算要求よりも1700億円分を確実に削るよう求める方針だ。
 厚労省は、高齢化に伴う年金や医療など社会保障費の「自然増」を来年度6700億円と見込んでいるが、財政審の提言案では、診療報酬や薬価の見直しによって自然増を「確実に5千億円弱にすることを求めたい」としている。

社会福祉法人のカネ、遅れる法整備 「あそか会」元役員の子が親族企業に8億円

朝日新聞 2015年11月16日

介護施設や病院などを運営する東京都の社会福祉法人（社福）「あそか会」で、法人元役員の子が親族が経営するファミリー企業に約8億円の資金が流れるなど、不適切な会計処理の実態が第三者委員会の調査で分かった。非営利が前提の社福を「私物化」する事例は各地で相次ぐが、社福の運営を透明化する法整備はたなざらしになっている。

あそか会からファミリー企業へのカネの流れ(→)



あそか会は、東京都江東区で病院や特別養護老人ホームなどを運営している。社福の収入の多くは、税金や保険料、利用者負担を原資とする介護報酬や診療報酬など公的なお金だ。

その特養が、あそか会元常務理事（昨年5月末に退任）のファミリー企業と建物管理で独占的な契約を結んでいたことが昨年6月、朝日新聞の報道で明らかになった。関係者によると、元常務理事はあそか会の経営を立て直し、事務局長として約30年にわたり運営を取り仕切ってきたという。

江東区などが「透明性を欠く経営だ」と指摘したため、あそか会は弁護士ら第三者による調査委員会をつくり、10月末に調査報告書をまとめた。報告書によると1990年代以降、あそか会での不透明な資金処理は約20億円にのぼり、このうち少なくとも8億円程度は元常務理事のファミリー企業に

渡ったとしている。

「最愛の妻」になぜ 老老介護の夫に猶予判決

朝日新聞 2015年11月14日

認知症が進む最愛の妻（当時81）に夫が手を掛けた。今年2月、大津市で起きた老老介護の末の事件。半世紀連れ添った夫婦に何が起きたのか。4日間の裁判の傍聴から振り返る。「被告を懲役3年に処する。5年間、刑の執行を猶予する」。12日、殺人罪に問わ

れた重政司朗被告（83）の判決。大津地裁の川上宏裁判長の言い渡しを、被告は背筋を伸ばし、表情を変えずに聞いた。

検察側の冒頭陳述や家族の証言などによると、被告は知人の紹介で知り合った日出子さんと30歳で結婚。「司朗さん」「でこ」と呼び合い、出勤の際は玄関でキスを交わした。近所で評判になるほどの仲だった。

2人の子が独立し、夫婦だけの生活に。4年前、妻がアルツハイマー型の認知症と診断された。食事の用意や掃除、洗濯……。介護の日々が始まった。

■迷惑かけたくない

医師から「治らない」と告げられた。認知症への効果をうたうアロマや20万～30万円のネックレスなどを買って回復を願った。

妻の症状が進み、やがて話しかけにも応じなくなっていった。室内で失禁することも度々。被告の説明では、毎日午前3時ごろ、妻を抱きかかえトイレに行くため、慢性的な睡眠不足になった。だが、夫婦2人でいたいとの思いと金銭的事情から、老人ホームなどへは入所しなかったという。

周囲には助けを求めなかった。長女は証人尋問で「父の口癖は『子どもに迷惑をかけたくない』。家はきれいに片付いていた。追い詰められていたとは知らなかった」。東京に住む長男は「まじめな父に任せておけば問題ない、と思っていた。もっと話をしていれば…」と法廷で悔いた。

■もがき苦しんだ

事件前日の2月27日。介護は3年半に及んでいた。浴槽に入れずに洗い場に座り込む妻を見て、足腰がさらに弱ったとショックを受けた。翌朝には、妻がズボンをはけない様子を目にし、殺害を決めた。「ほかに方法はなかった」と証言した。

判決によると被告は午前9時半ごろ、いすに座った日出子さんの首を背後からタオルで絞め、窒息死させた。その後、自ら110番通報し、殺害を伝えた。

公判で被告はどんな問いにもはきはき答えた。弁護人の被告人質問の一場面。

——なぜ介護の助けを求めなかった？

自分でやろうと決めていた。妻を愛しているから。

——殺害時の心境は？

あの世に送るよ、我慢しいや、と声をかけた。妻はほほえんだように見えた。

——今振り返って

希望も楽しみもない。出口がない真っ暗なトンネルで、もがき苦しむような気持ちだった。

検察側は「殺害が唯一の選択肢といえず、短絡的な意思決定だ」と懲役5年を求刑。弁護側は「妻への愛情と強い責任感ゆえの事件。同情されるべきだ」と主張していた。

判決で裁判長は「意思決定は短絡的で非難は免れない」とする一方、「献身的に介護し、介護の不安や苦しみから解放されたいと犯行に及んだことは同情の余地もある」と執行猶予の理由を述べた。被告は深々と頭を下げ、法廷を後にした。（島崎周、杉浦奈実）

■「介護者にもケアを」 専門家

警察庁によると、介護や看病の疲れが原因とされる殺人事件は昨年42件。うち12件の加害者は、65歳以上の男性だった。

「認知症の人と家族の会滋賀県支部」の青木雅子代表（66）は「多くの男性は仕事のように介護に関わる。だが、仕事と違って終わりが見えず、回復などの結果も出ないことで落ち込んでしまう」と指摘する。

月1回開いている男性介護者の集いへの参加者は毎回十数人。失禁などを他人に知られると、自身も認知症の本人も自尊心が傷つけられると心配して相談できず、追い詰められる人も少なくないという。

介護について研究している立命館大学の斎藤真緒准教授（家族社会学）は、介護者に対するケアにも目を向けるべきだと主張する。「ケアマネジャーらも、介護者より要介護者に

目が向く。専門家が連携して、介護者のSOSのサインをとらえられていれば、悩みに寄り添える機会ができたかもしれない」と話す。

【府中刑務所文化祭】「臭い飯」は臭くなかった 塀の中の素顔を…ツアー参加者1万8000人

産経新聞 2015年11月16日

いわゆる“臭い飯”を模した弁当。上からカレー、ブルコギ、すき焼き。左は今回のポスター



普通の生活をおくる人間にとって、普段、縁がなく、できれば一生関わりたいくない場所の1つに刑務所がある。その刑務所の中でも、日本一の規模を誇る「府中刑務所」（東京都府中市）が、犯罪とは無関係の一般人でにぎわう日がある。それが毎年文化の日で開催される「府中刑務所文化祭」だ。普段、中を垣間見る機会がなかなかない刑務所だが、

入場無料ということもあり、怖いもの見たさなのか、40回目の今年、集まった見学者は実に約1万8000人。「臭い飯」と伝わる受刑者の食事を再現した弁当を購入できるほか、受刑施設の一部を見学できる「プリズンアドベンチャーツアー」も人気だ。去る11月3日に開催された第40回文化祭に潜入してみた。

1000人以上が長蛇の列

府中刑務所は、東京都西部・府中市の京王線府中駅から住宅街を北に抜けると突然現れる。高く長い塀に囲われた外観は、やはり少し近寄り難くもある。途中の道には、見学希望者だろうか、人々が列をなして刑務所を目指していた。



午前10時スタートとのことだったので、到着したのは少し早めの午前9時2



0分ごろ。すでに、入口前には千人以上が開会を待っているだろうか。昨年の入場者が約1万5千人、刑務所を所管する法務省の幹部からも事前に「結構人気があるんですよ」と聞いていたものの、思った以上の盛況ぶりだ。府中刑務所の職員によると、この日、通勤した午前7時ごろにはすでに50人程度が並んでいたという。



午前10時、人気ダンスボーカルグループの「MAX」のメンバー3人らによるテープカットで開会。MAXは今年4月に法務省から、全国の受刑施設の支援などを行う矯正支援官に任命された。この日は矯正支援官の活動の一環として府中刑務所の1日所長を務めた。



開会式が終わると、文化祭を待ちわびていた見学者が、一斉に刑務所内になだれ込んだ。

レアな網走牛は少し高め、レットルの由来

まず向かったのが、府中刑務所庁舎1階の食堂に設置された「麦飯食堂」。ここでは、受刑者に普段、提供される食事を基に考案された「プリズン（刑務所）弁当」が購入できる。昨年までは定食形式で提供していたが、今年はより多くの見学者に提供できるよう弁当にしたのだという。

メニューはプルコギ（韓国風の甘辛牛肉炒め）弁当（600食限定）とカレー弁当（300食限定、いずれも500円）。それに、北海道・網走刑務所の農場で受刑者が育てた「網走監獄和牛」を使用したすき焼き弁当（100食限定、1000円）だ。府中刑務所の職員は「網走牛は数が限られるので、確保が大変なんです。だから、こういう数と値段になりました」とのこと。いずれも売り切れ必至とのことで、いち早く並び3食とも確保した。

弁当のために朝食を抜き空腹が限界に近づいていたため、早速、ふたを開けるてみる。「臭い飯」のイメージに、恐る恐る顔を近づけると、鼻腔には食欲をそそる香りが広がる。いずれも食堂名の通り麦飯が添えられており、少し辛めながらお袋の味のような素朴なカ味わいのカレー、甘辛く味付けられたプルコギ、柔らかく噛むと肉のうまみと甘みが広がる網走牛と、三者三様の味わいながらいずれも美味。うれしいような、拍子抜けのような…。

「臭い飯」という巷の評判は何だったのだろうか。府中刑務所の職員がその由来を分析してくれた。それによると、受刑者の房はトイレが備え付け。それゆえに「房内での食事の時に、トイレが匂うということで『臭い飯』となったのでしょう。とは言っても、トイレにフタはありますし、房内での食事も朝食くらいです」と苦笑いだった。

近くでカレーに舌鼓を打っていた20代の女性2人も「えー、臭くない」「普通においしいじゃん」と楽しんでいた。

屋久杉の高級テーブルやおみこしも販売

「臭い飯」のほかに人気なのは、コッペパンとレーズンパンのセット。2つ100円で販売される。弁当完食後に販売所に向かったが、すでに100メートル超えの長い列。この日は午前中800セット、午後700セットの販売予定で、開場約30分後には、係員が「午前中はあと100です」と購入希望者に呼びかけるほどだった。

完全に出遅れたと感じ、パンの購入は泣く泣く諦めることに。毎年購入しているという40代の女性によると、「中がしっかり詰まった、懐かしい味」とのこと。来年こそはとりベンジを誓った。

会場では、受刑者が刑務所作業で制作した家具や革靴などの即売も行われる。「監獄製」は、質が高くて安価と愛好者も多い。

革靴が5～6000円程度で販売される他、家具は数万円の日用品から高級品まで多種多様。ほかにも枕や箸、お盆のような日用品やうどん、カバンやベルト、バーベキュー用品まである。また刑務所の名前が入った巾着袋や前掛けなどのグッズも人気だ。この日の即売で最も高価だったのは108万円のおみこし。また、高級感あふれる約50万円の屋久杉製テーブルは、開場から1時間もしないうちに「売約済」となっていた。

出場券、無くすと「出所できない可能性があります」

府中刑務所の敷地は約26万平方メートル、収容する受刑者は現在約2100人で、日本最大の受刑施設だ。受刑者のうち約400人が外国人と多国籍。また、指定暴力団山口組の篠田建市（通称・司忍）組長（73）が約4年前まで入所し、現在もナンバーツーの高山清司受刑者（68）が受刑している暴力団関係者の収容先としても知られる。

文化祭では、受刑者を直接目撃することは不可能だが、その日常を垣間見することもできる。「プリズンアドベンチャーツアー」では、録音や録画は禁止だった一方、受刑者が作業を行う工場や浴場を見学できる。

刑務所西側の受刑施設の入口に並ぶこと数10分。手荷物を渡されたポリ袋に入れ、きつく縛って抱える。そのまま少し待つと目の前の金属製の扉が左右に開く。すると、奥にはもう1つ、閉ざされた重い扉。一定の人数になると、今、入ってきた背後の扉が閉じる。

「無事、娑婆に帰ることができるだろうか」そんなことが頭をよぎっていたその時、職員によるダメ押しが。「お手持ちの入場券は出場券になります。途中で無くしてしまうと、出所に手間がかかる可能性があります」。お決まりのネタなのだろう、職員は慣れた様子だ。苦笑いを浮かべざわつく見学者。職員はさらに「出所の記念に出場券はお持ち帰りください」とたたみかける。

「かけ湯は2杯」まで

見学者がまず向かうのは工場だ。途中、目に入った脱衣場には、作業服が掛かっている。トラブル回避のためだろう、見たところハンガーは取り外し不可能な構造だ。作業場には複数の工作機械があり、中央奥には職員が監視するために一段高くなった場所がある。作業にあたって受刑者に向けられた10訓は日本語の他、ローマ字、中国語、ハングル、英語表記も。外国人受刑者を数多く抱える府中ならではだ。

次は浴場。正面に入浴にあたっての注意が掲げられている。「かけ湯は2杯まで」などと表記され、入浴中の合計も12杯と厳格なルールがある。

「当たり前なのだろうけれど、お風呂も自由に入れないのか」。隣で見物していた50代の男性は感心しきりだった。

見学コースが一通り終わり、入場の際の重い門の脇にある狭い扉から外に。非日常から日常に、娑婆の空気を胸一杯に吸う。少しの間だったが、受刑者の日常を感じた。

法務省の幹部は「普通の日常生活になじめず、犯罪者になってしまった受刑者も多い。朝、決まった時間に起床して食事と労働。規則正しい生活を習慣づけて、出所後に備えてもらう」と話す。スムーズに普通の日常に復帰できれば、再犯防止に役立つとの考えがあるのだという。

普段、あまり深く考えることのない扉の中。非日常を楽しみつつも、犯罪や刑罰について考える契機にもなった1日だった。

「聖地」で車いすマラソン 白熱のリオ代表争い 日本経済新聞 2015年11月16日

サッカーで「聖地」といえば、取り壊された旧国立競技場（東京・新宿）が思い浮かぶ。埼玉スタジアム2002（さいたま市）ができるまでは、木村和司のFKがゴールに突き刺さった日韓戦（1985年）など、日本代表がワールドカップ（W杯）予選で数々の名勝負を繰り広げてきた舞台で、その称号に異を唱える人は少ないだろう。

ラグビーなら西の花園ラグビー場（東大阪市）か、東の秩父宮ラグビー場（東京・港）かで迷うところだが、軍配は東にあがるか。日本代表が71年にイングランド相手に3-6と大接戦を演じた試合、89年にスコットランドを28-24で破り、初めて主要8カ国から勝利を挙げた試合など、記憶に残る熱戦がここであった。



大分市の商店街のアーケードをパレードする車いすマラソンの選手たち

■今年で35回目、のべ1万人が参加

では、障害者スポーツで「聖地」と呼べるところはあるのか？ 11月8日、来年のリオデジャネイロ・パラリンピックの代表選考レースとなった国際車いすマラソン大会が開かれた大分市は、間違いなく「聖地」といえる場所だろう。大会が始まったのは81年。日本の「障害者スポーツの父」といわれる故・中村裕博士が、国際障害者年の記念行事として、大分県庁などに働きかけて第1回大会が実現した。

国立別府病院整形外科科長だった中村博士は60年に英国に留学、パラリンピックの源流となった脊髄損傷者によるスポーツ大会を開いていたストーク・マンデビル病院で学び、障害者スポーツの重要性に気づく。帰国後、64年の東京パラリンピック開催に奔走して自ら日本選手団団長に就任。75年にはアジアや南太平洋諸国の障害者スポーツの祭典「フェスティック（現アジアパラ競技大会）」を創設し、続いて地元大分で手掛けたのが大分国際車いすマラソン大会だ。

障害者に働く場を提供する社会福祉法人「太陽の家」も設立した中村博士の功績については稿を改めたいが、第1回大会は14カ国から117人が参加し、ハーフマラソンを走った。第3回大会からフルマラソンの大会となり、35回目の今年には19カ国から283人がエントリーした。30年以上の歴史をもつ車いすマラソン専用の大会は世界でもここだけで、昨年までの参加者はのべ1万人以上にのぼる。

■沿道の地域住民もコース清掃協力

7日にあった開会式からしてユニークだった。競技場や体育館で行うのが一般的だが、会場は大分駅前を中心商店街にある広場だった。多くの買い物客が集まる中で選手宣誓があり、その後選手たちは車いすに乗ってアーケード内をパレードする。それが終わると、広場に即席記者会見場がしつらえられて、報道陣と有力選手が一問一答。例年の恒例行事だということから、大分市民は間違いなく、日本で一番、パラ（障害者）アスリートに接する機会が多いと思う。



歴史が積み重なれば、街全体が優しくなる。主催者の大分県障害福祉課の広瀬幸一郎さんによると、大会に携わるボランティアや関係者は約2000人。ところがそれ以外に、毎年大会近くになると沿道の地域住民らがコースの清掃活動に乗り出し、選手のために露払いをするという。そうした勝手連的なボランティアは「把握していないが、かなりの人数がいる」と広瀬さん。

沿道で多くの市民が応援する中、スタートした大分国際車いすマラソン

選手にとってそんなホスピタリティーあふれる大会の人気は高かったが、実は参加者数は2000年前後の400人台から年々減っていた。交通事故の減少で車いす陸上に取り組む脊髄損傷者自体が減った上、パラアスリートのプロ化が進み、00年に車いす部門を設けたニューヨークシティー・マラソンと日程が近く、賞金のない大分を敬遠する選手が出てきたのだ。

■賞金額引き上げでトップ選手参加

そこで10年の第30回大会は記念大会として1位50万円、2位30万円、3位10万円の賞金制度を初めて導入、世界記録を出した場合のボーナスも50万円と設定した（翌年からは1位30万円、世界記録20万円と減額）。ただいかにせん、1位に1万5000ドル（約185万円）を出すニューヨークやボストンに比べると太刀打ちできない。選手の減少傾向は止まらず、昨年は233人まで減った。

広瀬さんによると、「トップアスリートは賞金目当てで、生活の糧として調整してくる。段違いに額が少ないので見向きもされなかった」という。「環境はいいけど、賞金がねえ」との声も聞こえてきた。このため、今回一気に賞金額を引き上げた。1位100万円、2位50万円、3位30万円とし、ボーナスも世界記録100万円、日本記録50万円に増額した。「トップ選手が来てくれる大会とし、それによって一般の参加者も走ろうと思ってくれれば」と広瀬さん。効果はてきめん。今年のエントリー数は前回は上回り、男子で昨年の世界ランクトップ10のうち8人がやってきた。前回は4人だった。大会で3度の優勝経験があり、5年ぶりの参加となった世界ランク1位のエレンスト・ヴァン・ダイク（南アフリカ）は記者会見で開口一番、「プロの時代へようこそ！」と賞金増額を歓迎。「20時間も飛行機に乗る長旅が好きだから来るのではなく、プロとしてお金を払ってもらえるから来るのだ」と強調した。

■障害者スポーツにもプロ化の波

パラアスリートが賞金稼ぎ、という語感に違和感を覚える向きもあるかもしれない。だが、健常者スポーツのプロ化の波が、何年か遅れで障害者スポーツにも訪れただけで、障害者スポーツがきちんと、「スポーツ」として認識されつつある証左ととらえたい。中村博士が大分国際車いすマラソンをつくった時にこだわったのも、大会は親善ではなく、力や技を競う「スポーツ」であることだった。

第1回大会では、先頭を走っていたオーストリアのゲオルグ・フロイントと米国のジム・クナウブがお互いの健闘をたたえ合い手をつないでゴールした。しかし中村博士は両者優勝を認めず、写真判定をしてフロイントを1位、クナウブが2位と決めた。両選手は怒ったが、中村博士は譲らなかった。同博士の長男で、「太陽の家」の中村太郎理事長によると、「大会は福祉じゃない、スポーツだ」と力説していたという。

今年の大会はトップ選手が多数参加、さらに日本人選手にとってはリオの代表選考レースとなったこともあり、白熱した。



日本人トップの2位でゴールし、リオデジャネイロ・パラリンピック出場権を獲得した山本

■49歳のベテラン、山本が代表切符

「レーサー」と呼ばれる、象の鼻のような特殊な三輪車いすを使う車いすマラソンは、自転車競技と同様、先頭に立つよりも、その後ろで風をよけながらこぐと6～7割の力についていけるので有利だ。ゆえに、誰が先頭に立つか、どういう順序で先頭をローテーションするかの駆け引きがある。ただ、リオ代表に選ばれるために男子は1時間27分以内にゴールしないといけなかったため、けん制しあってばかりではタイムが伸びない。

これまでなら大会5連覇中のマルセル・フグ（スイス）が早々と独走してゴールテープを切ったのだが、今回は日本人選手も積極的に飛ばして入れ代わり立ち代わり先頭に立ち、上りや下りで誰かがしかけるとすぐに追いつくという展開が37キロ付近まで続いた。結局そこからフグが振り切って6連覇を達成し、49歳のベテラン、山本浩之が1時間25分2秒で日本人トップの2位となってリオ出場権を獲得した。沿道で見ていた大分の人々にとって、目の前でデッドヒートを演じた選手たちは、「障害者」ではなく、普通の「アスリート」としか映らなかつたらう。まさに「スポーツ」だったのだ。（撰待卓）

障害者らコンサート 岩国の商店街で演奏や歌

息の合ったミュージックベルの演奏を披露する出演者ら

障害のある人や支援団体が演奏や歌などを披露する「みんな輝け！！ひかりコンサート」が15日、岩国市の中通り商店街で開かれ、市内外から約30の個人・団体が出演した。

音楽を通じた障害者支援に取り組む市民団体「コンチェルト」（中村桂子会長）と国際ボランティア団体「岩国ワイズメンズクラブ」が主催。毎年春と秋にJR岩国駅で開催していたが、駅舎建て替え工事により会場を移した。コンサートでは、岩国総合支援学校の生徒や各支援団体が歌謡曲やアニメソングを歌ったり、ピアノ、ミュージックベルなどの演奏を繰り広げたりした。買い物客らは足を止めて聞き入り、拍手を送っていた。中村会長は「障害のある方と触れ合ってもらっただけでなく、コンサートの開催が地域の活性化にもつながれば」と話していた。

読売新聞 2015年11月16日



若年性認知症、社会に橋渡し 専門コーディネーター、熊本県、熊本市は先行配置

西日本新聞 2015年11月15日

65歳未満の若年性認知症の人や家族を支援する専門のコーディネーターが、2016年度から全都道府県に順次配置されるが、熊本県と熊本市が昨年5月に九州で初めて先行配置し、1人が既に活動を始めている。働き盛りで発症し、勤務先の会社から退職を余儀なくされ、社会とのつながりを断たれて引きこもってしまうケースも多い若年性認知症。コーディネーターには、患者それぞれの症状や希望に沿った新たな「居場所」へのつなぎ役が期待されている。

62歳のときに若年性認知症と診断を受けた女性が、熊本市内の児童養護施設で週1回、ボランティアで子どもたちの保育の手伝いをしている。子どもたちと縄跳びを回したり、砂遊びをしたり…。「家にいても、一人でぼーっと一日を過ごすだけ。子どもたちは寄って

きてとてもかわいいんです」。女性に子どもたちはなつき、遊んでもらおうと列をつくることもある。女性を保育ボランティアにつないだのは、県と市の委託を受けた若年性認知症支援コーディネーターの太田千里さんだった。

パート勤務だった女性は、発症をきっかけに同じ顧客に何度も電話をかけるなどのミスが続き、2年前に解雇された。女性の次女は「生活の中心だった仕事がなくなり、すべてのことに意欲を失っているようだった」と振り返る。

次女が「認知症ほっとコール」に相談。サポート役として引き受けた太田さんは「子どもと関わりたい」という女性の希望を聞き、児童養護施設のボランティアを見つけた。しかし、若年性認知症の人を受け入れた経験がない施設は当初、「子どもに危害を加えるのでは」と消極的だったという。

太田さんは女性の主治医や作業療法士から聞き取りをして、「絵本の読み聞かせなど、グループではなく1人で子どもたちと接する遊び方が望ましい」といった留意すべき点を施設に伝えた。その後、施設側はボランティアとしての受け入れを決めたという。

社会福祉士などの資格を持つ太田さんは、本人の症状や趣味に合った居場所づくりを心掛けている。「働きたい」との要望があれば事業所を見つけて紹介したり、「パソコンを習いたい」という人には、地域活動支援センターのパソコン教室につないだり、発症後も働き続けている人のために、会社と交渉して配置転換を求めたこともある。

「どこにもつながっていない空白期間が長いほど症状は進んでいく。発症してもできることはたくさんある。本人の可能性を生かし、選択肢を一緒に見つけたい」と太田さん。県認知症対策・地域ケア推進課によると、県内の若年性認知症の患者数は少なくとも約900人。太田さんは「早期に診断されることは重要だが、早期絶望になってはいけない」と強調している。認知症ほっとコールは県と市の委託を受けて「認知症の人と家族の会熊本県支部」が運営している。

<ねえねえちょっと> 知的障害の娘が更年期 中日新聞 2015年11月16日

「知的障害の娘が更年期」の心配性の母さん（十月二十六日付）へ。

娘さんの通っていた作業所に親のネットワークはありませんか。もしあれば、同じような経験をした人を探して助言を仰いで。作業所にネットワークがなければ、障害者の親でつくる自助グループを頼ってはどうかでしょう。いずれにしても、経験者から知恵を借りるのが得策だと思います。今のままだと、引きこもりになるかもしれません。娘さんがどの程度コミュニケーションできるかによりますが、引きこもり対策として、心療内科などでカウンセリングを受けるのも一つでは。＝愛知・げんし（75）

知的障害者は繊細で、周囲の変化に敏感なことが少なくありません。知的障害があって特別支援学校の高等部に通う長男は母親思いで、私が体調が悪いときなどにつらそうにしていると、精神的に不安定になります。将来や年を重ねるお母さんのことなどを、娘さんなりに心配しているのかもしれませんが。更年期に関しては、医師や薬剤師と相談して漢方薬などを工夫して飲んでみては。役所の担当課でも相談に乗ってくれるかもしれません。一方で、笑顔で接してあげていれば、多少でも改善されるかもしれません。私も心配性ですが、長男の前ではできるだけ明るくしています。＝愛知・もちぎんちゃく（46）

◆婚姻手続きに母が過干渉

結婚のことで、母からの干渉に戸惑っています。婚姻届を出す日を彼と話し合っただけでしたが、「日取りが悪い」と別の日に変えさせられました。両家の顔合わせの際も、私たちが考えた場所はことごとく拒否され、結局母の指定した店に。今のところ、彼やその両親は干渉を気にしていないようですが、先が思いやられます。＝愛知・葉月（27）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行